

<p align="center">< 感謝 ></p> <p>クリスマスにはたくさんのカンパをありがとうございました。現地では文具や遠足代のほか、教室の竹壁補修や学校でのクリスマスパーティ費用に使いました。一部は、現地で救援活動をしていたJVCを通じてパキスタン地震被災地に寄附させていただきました。</p>	 <p align="center">2006年1月28日発行</p>	<p>NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会 (英文名略称・HANDS) 227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11 TEL:045-962-0824 FAX:045-962-1933 E-mail: hands-ty@07.itscom.net http://www.jca.apc.org/~hands/ 郵便振替口座 00210-5-72693 (加入者名) ビラーンの医療と自立を支える会</p>
--	--	---

3年間の給食プログラム・1年目

— 魚をあげる？魚の獲り方と網を支援する？ —

山崎登美子

「児童の体重が確実に増えてきました。授業にも集中するようになりました。」ラムアプス小学校のマリオ先生は、お皿を手に列に並ぶ子どもたちに目をやりながら、嬉しそうに報告してくれました。

松尾基金による校舎増築工事の進捗状況を見ようと1年ぶりに訪ねたラムブソンでは、週3回の給食の日に当たって、私も薄い塩味のお粥給食を体験することができました。1人1切れ鶏肉がいきわたるようにと当番のお母さんは注意深くお玉を使っていますが、中にはいくら粥をかき回しても肉の欠片さえ見つからなかった不運な子どももいたようです。

1分足らずで胃袋に流し込める粥メニューのためか、大部分の子どもたちは校庭に立ったまま、あるいは校舎の建設資材に腰を下ろして給食を平らげました。ところが教室をのぞくと、バナナの葉に山盛りのご飯を食べている子が3人、また校庭に隣接しているマリオ先生の家では、6年生の長女が同じくバナナの葉にくるんだご飯を食事中でした。この地域は年1回陸稲を収穫できます。訪ねたのは端境期の11月でした。十分な農地(といってもすべて山腹斜面です)があり、米の備蓄が可能な家だけご飯の弁当を持たせたようです。

お粥給食だけの子どもと、持参した弁当も食べる子どもがいることをここで問題にするつもりはありません。みんなが給食実施を喜んでいるのを目の当たりにし、成果の報告を聞くほどに、3年という期限付きにした給食事業の今後をどうするか、会の支援姿勢を早めに検討する必要を感じました。

「魚をあげるのではなく、魚を獲る手段の支援を」という会発足当時のCMBディレクター・ビトイ神父の方針に賛同して、私たちは魚を与える事になる給食プログラム実施を見合わせてきました。例外は数年前の大干ばつ時の3ヶ月だけです。



「魚を獲る手段の支援」とは、開発業者から先祖伝来の土地を守ろうという住民の組織化を支えたり、校舎建設・教師の給与補填・奨学金による教育支援、アグロフォレストリーや現地製品の販路拡大などです。

いずれもすぐ成果が出るものではなく、今その成否を評価するのは早計ですが、住民の組織化、特に組合育成についてはラムブソンを除いてうまくいっていません。42号で紹介の元HANDS奨学生スヌーリアのビラーン人によるビラーンの組合構想も見通しが甘く、すぐ支えるのはかえって弊害があるとの結論になりました。

今年7月に会は設立10周年を迎えます。これまで私たちは信頼できる現地組織に恵まれたため、その理念を共有することでよしとして、住民が望むのが「魚」なのか「網」なのかさえも確かめずに活動を続けました。今後は現地組織との信頼関係を維持しつつ、直接住民の声を聞き一緒に考える機会を増やしたいと思っています。幸いボランティアスタッフ相田さんが今現地に滞在されていて(P4)、精力的に支援地域を歩いてその報告を事務局に届けてくれています。近い将来の現地事務所開設に繋がることを期待しています。スタッフの現地派遣に関して最大のネックだった治安問題も今のところ心配ないようです。この状況が続くことを願うとともに、私たちの活動もミンダナオの平和構築に少しでも役立つことができればと思います。